所報

No. 44

佐賀県教育センター
佐賀県佐賀郡大和町川上
TEL 0952−62−5211

もくじ

○ 自己教育力……1
○ 昭和61年度研究発表報告……2
○ 教育実践・研究記録入選者の声……3
○ 全体研究発表―いじめの背景を考える―……4
○ 指導のチェックポイント―高校英語・中学道徳―……6
○ 昭和62年度教育センター研究主題と研究委員の紹介……9
○ 教育図書・研究資料の利用案内とお願い……10
○ 新任です。よろしく!!……11
○ 私のすすめる一冊の本，昭和62年度教育実践・研究記録募集……12

自己教育力

佐賀県教育センター所長　原　正水

最近，自己教育力という言葉がよく使われる。去る5月，広島市で全国教育研究所連盟の総会と研究発表会があった。231の機関が加盟している大きな団体であるが，共同研究のテーマは「自己教育力を育成する学校教育のありかたについての研究」である。

なぜ，自己教育力の育成が今強調されなければならないのだろうか。

最近の子どもはハングリー精神に欠けている。そのためだろうか。

これからの社会は，情報化・国際化・成熟化など激しい変化が予想されている。そのためであろうか。

それとも，これからの学習は，学校教育の自己完結的な考え方を脱却し，生涯学習体系へ移行すべきであるという考え方が根拠となっているのだろうか。

私は，常日ごろ，教育とは，自分で自分の人生を切り拓いていく力を身につけさせることであると考えているので，自己教育力という言葉を聞くと，今更，何をという思いが先に立つ。しかし，今日，自己教育力の育成が強調されているのは，それなりの意味があってのことであろうし，私たち教育に携わる者は真剣に取り組まなければならないことに変わりはない。

さて，それはさておき，私はこの四月，当センターに着任し，先輩の実績に学びながら，センターの在り方について勉強しているところである。教育センターに課せられた課題は多い。実態を把握する調査研究，教育内容・方法の改善，あるいは研修の在り方等々，時代の進展に遅れてはいないか，学校現場の要請にこたえているか，教育センターでしかできないこと，教育センターだからできることに十分対応し得ているかどうかなど，考えなければならない課題は多い。

昔，ある尊敬する先輩が「先生は勉強せにゃいかん。生徒は、先生が研究している姿を見て成長していくものだ」といわれたことが今でも耳に残っている。

子は親の背中を見て育つというが，教育の在り方の根本を指しているといえるだろう。自己教育力の向上は，生徒のことに留まらず，われわれ教師の課題でもあるようである。

あれこれ考え合わせると，教育センターの在り方の一つの柱は，自己教育力の向上にあるのではないか。一つは，先生方の自己教育力向上のお手伝いをすること，二つは，高い先生方の自己教育力におこたえすること，三つは，われわれセンター所員が自己教育力の向上を図ること，そして，先生方の要請に十分こたえられるよう力量を高めることにあるのではないかと考えている今日このごろである。

終わりに，先生方の御多幸と御活躍を心から祈念するとともに，当センターの御活用を切にお願いして所報の巻頭言とする次第である。

昭和62年度佐賀県教育センター

研究発表会報告

本年度の研究発表会は，5月15日当センターで開催された。

開会式では，前年度の「教育実践・研究記録」入選者3名の表彰が行われ，そのあと県教育長，当センター所長のあいさつがあり，続いて研究発表に移った。

【全体研究発表会】は「いじめの背景を考える。」という題で指導相談係長　森崎寛が，61年度から取り組んでいる研究の中間発表を行った。

今日の児童生徒の心の荒廃を，子どもたちを取りまく環境の面から視点をあて，考察・分析がなされており，今後はさらに事例分析を進めて63年度には研究が完結されることになっている。

【分科会発表】は「教育実践・研究記録」の入選者と当センター所員，前所員がそれぞれの分野で研究の成果を発表した。

① 教育実践・研究記録入選者の発表

○（小学算数）形成的評価を重視した算数指導の試み――基礎的・基本的事項の定着をめざして――

（赤松小・大坪　康浩教諭）

○（小学教育相談）問題行動をおこした児童との心の交流を求めて

（鹿島小・川原みさ子教諭）

なお，（中学音楽）音楽授業における障害児教育の実践――オムニコードを活用して――

（成章中・増富　彰子教諭）

は先生の都合で発表できなかった。

② 所員（前所員）発表

○（小学国語）読みの学習における形成的評価と指導に関する研究

○（小学社会）地域の素材を生かした教材開発に関する研究

○（小学算数）個の学習を成立させるための算数科学習指導の工夫

○中・高の連携を図った学習指導の工夫

（中学国語）古典の教材分析と指導計画について

（中高社会）「公民的分野」と「現代社会」を中心にして

（中高数学）「方程式と不等式」の教材分析と指導のあり方について

（中高理科）理科学習実態調査をもとにした学習内容の検討と指導について

（中高英語）重要文例集の作成

以上が分科会における発表である。詳細な内容については，各学校にすでに配布している「教育実践・研究記録集№8」及び「佐賀県教育センター研究紀要第10集」に掲載している。

【展示】

○（物理）不思議な天秤，面白い鏡，手動式簡易赤道儀，立体磁界観察槽

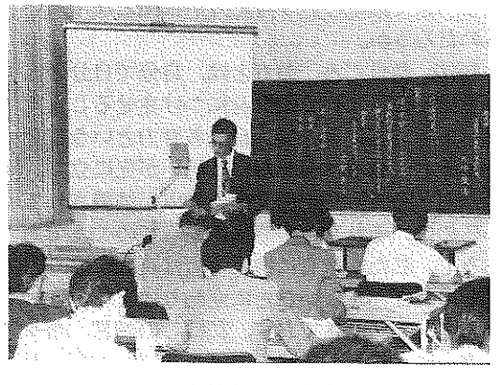
○（化学）「組成式（エタノール）の決定」実験装置

○（生物）無菌箱，循環系模型

○（地学）天体写真

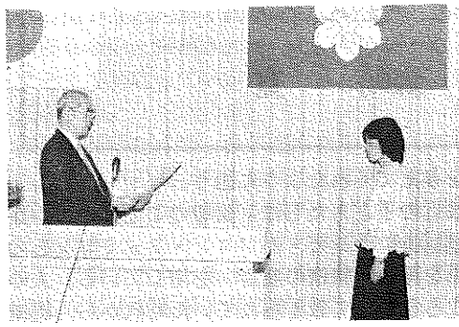
○（情報処理教育）数値制御（NC）工作機械による「イニシャル」や「家紋」等の作品展示

今年度の参加者は，小学校関係70人，中学校関係32人，高校42人，その他31人，計175人で例年に比べて若干参加者が少なかった。



分科会での発表

教育実践・研究記録入選者の声



教育実践・研究記録入選者の表彰

音楽授業における障害児教育の実践
―オムニコードを活用して―

佐賀市立成章中学校

教諭　増富　彰子

この研究実践では，音楽の授業以外に個人指導を継続したこと，50分の授業の中の10分間だけを障害をもつ生徒Ｉ君の時間として，クラス全員が，Ｉ君に音楽的なかかわり（合奏）をもったこと，生徒たちが知らない楽器（オムニコード）を活用したことが効果的であったと思われる。健常な生徒の中で，障害をもつ生徒の音楽の力を伸ばすことができたし，そのクラスの生徒たちが，Ｉ君のことを少し理解でき，協力できるようになってきたことを喜んでいる。

今年，Ｉ君は3年生になり，親学級は私のクラスに所属した。中学校では，1度も親学級で昼食ができなかったＩ君が，生徒たちの協力によって，クラスの生徒44名と毎日，昼食がとれるようになった。今後も，教科担任として，親学級の担任として，特殊学級の担任と密に連絡し，話しあって，Ｉ君の学習面，生活面を伸ばしていきたい。

形成的評価を重視した算数指導の試み
基礎的・基本的事項の定着をめざして

佐賀市立赤松小学校

教諭　大坪　康浩

目の前の子供たちを，なんとか算数好きな子供にしたい，算数の楽しさを教えてやりたいと思って考え出したのが形成的評価を取り入れた学習指導法です。いろんな壁に突き当たり，そのたびに，いろいろな先生方のアドバイスをいただき，どうにかやってきました。この一年間の研究を通して，私の目には，成果が上がってきたように映りました。でも，本当にこのやり方でいいのだろうか，という不安が常にありました。未熟な私に，一生懸命ついてきてくれる子供たちに，申し分けないという気持ちになることもありました。

幸い，この実践を多くの先生方に認めていただき，「まちがっていなかったんだ」と安心できて，とても幸せな気持ちです。

これを機に，これからも子供たちに確かな基礎学力の定着をめざして，子供たちと共に，一歩一歩進んでいきたいと思います。

問題行動をおこした児童との心の交流を求めて

鹿島市立鹿島小学校

教諭　川原みさ子

この事件がおきた時，なぜわが学級にとか，未然に防ぐ手だてはなかったのかとか，あの子たちの言動になぜ細心の注意を払わなかったのかという思いがかけめぐり，何ら手をうつすべも知らずおろおろしていた。まさか一年後にこういう形で公表し，その上入選までするとは夢にも思わず，状況の変化にただ驚いている。

今，静かに思い起こすと確かに子供たちは変わった。が何より変わったのは私自身のように思える。私の人生観さえ変えてしまったあの苦悩，試練が今は妙に光り輝いている。あの学級の子供たちの顔を思いうかべる時，今だに熱い思いで胸がいっぱいになる。そして教職という仕事に今ほど自信を持ち取りくんだことはないように思う。現在担任している子供たちのトラブルもいち早くキャッチし，即解決する術も身についたようだ。教師になった喜びをようやくかみしめている昨今である。

増富先生

大坪先生

川原先生

全体研究発表・発表要旨

—いじめの背景を考える—

指導相談係長　森崎　寛

指導相談部では，今，３年計画で「いじめの背景」について調査研究を進めている。

日ごろ教育センターで，いろいろな子どもたちに接しながら取り組んできたことをもとに，いじめの背景を考えてみると子どもの生活体験の希薄さが浮きぼりにされてくる。

最近，相談を受ける中でいろいろの子どもたちと出会うが，ひと昔前までの子どもたちとはどこかちがう感じがする。

子どもたちの体験が我々の子どものころとはちがう。考え方がかなりずれている気がする。どうも噛み合わない。いったいこれは何だろう…。そういうことを担当者同志で話し合う中で出てくるのは「体験」ということばである。

我々の子どものころは，自然の中でいろいろな体験を積んだ。山や川で自然を相手とし，豊かな遊び場を利用して遊びを楽しんだ。その遊びを通して，知らず知らずのうちに様々なことを学んでいったのである。その遊びも年齢の幅が広く，その中のリーダーを中心としていろいろな遊びのルールが設定され，小さい子への配慮もされた集団が構成されていた。これらのことは，今なお，我々の考えの中で大きな比重を占めているようだ。

ところが，最近はどうだろう。

子どもたちの生活実態調査を見てみると，１日に３時間ぐらいテレビを見る子が多いという。中には，３時間以上もテレビを見る子が５割以上という報告がされている学校もある。

機械文明が発達するにつれて，テレビ・パソコン・ファミコン等の機械を相手とした遊びが子どもたちの中に入りこみ，ますます増え続けてきている。これは，人間とつき合う時間より機械とつき合う時間が増えてきているということである。

我々の子どものころは，社会を知るのは父母のことばを通してであった。父母の体験が，そしゃくされたことばとなって注入され，間接体験を与えてくれたように思う。

最近の子どもたちは，父母のことばとのかかわり以上にテレビ・パソコン・ファミコンとの関係を深め，緊密の度合いを増している。人のこころを通して教えられていた時代から，機械を通して，機械を親として学んでいく時代へと社会が変容しつつある。

相談を受けている家庭で考えてみると，親子で話し合う時間が少ない。子どもたちは，テレビ・ファミコンと接する時間が長く，親から受ける影響以上に機械からの影響を受けることがかなり多くなっていると言える。つまり，人から語りかけられ，人のことばを通して人間的成長を促されてきた子どもたちであるとばかりはとらえられず，機械を親として入ってくるメッセージ（教え）を受けて成長している子どもたちが，かなり多くいることを認識しなければならないだろう。

こういう生活体験のずれが根底にあるためであろうか，今の子どもたちの考えていることをつかめないのもわかる気がする。しかし，指導する立場から，子どもたちの考え，育った家庭内の対人関係，教師との関係，社会環境との関係などをきちんとおさえなければ，適切な指導は望むべきもない。

さらに分析の視点として，朝からあくびが多い，授業を受ける姿勢が悪い，顔色に精彩を欠く，眠そうにしている，選挙の立候補者がいない，意欲的に取り組めないなど，諸々の問題行動を挙げなければならないだろう。

校内暴力，学校の荒廃が社会的問題となり，問題を持つ児童・生徒への対処が教師の悩みとなっていたのが，今は，質の変わった悩みがでてきつつある。

おもてだった子どもたちの問題行動は影を潜め，自分でやろうとしない，自分からとりかかろうとしない，自分たちから働きかけていこうとしない，言われたことは何とかするがそれ以上のことはしようとしない，というような受け身的な子どもたちが増えてきたことが指摘されている。

また，学校から目を転じてみても，若年層のアルコール中毒患者の増加，性非行，覚醒剤常用者の増加など，かくれたところで進行している問題も多いと指摘されている。そういうことまで考えて対応していかなければならないという気がする。

学校に行けなくなった子どもたちと話していても，クラスの友だちと仲良くして行きたいとは思うが，自分から働きかけていけないと言う子どもが多い。相手が働きかけてくれれば遊べるが，自分の方から積極的にかかわっていこうとはしない子どもが非常に増えていることを実感として持っている。自分で考え，自分で判断し，自分で行動を起こすプロセスが欠落している気がする。

今の子どもたちは，幼稚園のころからまわりの大人たちの指導できちんとしつけられているが，ちょっとしたいたずらでも，それを「いじめ」ととらえてしまう面があるし，わくぱく坊主の多かった我々の時代と比べ，人間関係でもまれた体験が希薄であると感じる。

なぜ，このように変わってきたのだろうか。

昭和30年を前後して，日本は高度経済成長の時代に入り，そのころ考えていた夢のような世界が現実のものとなり，合理的で便利な社会が出現した時に，我々の心の中にどういう変化が起こってきたかを考えたい。また，そういう中で，家庭にどういう変化が現れてきたかも考えたい。

昭和60年の国勢調査によると，一所帯3.14人である。これは，夫婦に子ども１～２人ということである。

昔の大家族中心の家族生活には，家父長の絶対的な力があり，それを支える秩序，道徳があった。現在のように価値観が多様化し，情報がはんらんした社会の中では，強力な指導がなされにくくなってきた。親自身，指導に混乱をきたしてしまっている。

昔は，親の役割をしておれば，子どもが親として認めてくれた。母親の朝の台所での仕事ぶり，昼間の父親の畑での仕事ぶりを見ながら父母の姿を認識し，感謝する心が育っていった。

ところが，最近のインスタント食品による同じ味の食べ物，できあいのもので食事をする現実をどう受けとめるとよいのだろう。昔の食事とちがい，機械が食事をつくってくれるのである。

今は，親がいっしょうけんめいに親であることを示さなければならない時代である。そうでないと，子どもは，父母を実感としてつかめないのではないだろうか。そういう子どもたちと我々は心を通わせることを考えなければならない。

保健室の話であるが，以前は10時ごろ保健室へ入ってきていた子どもたちが，今は，朝登校後すぐに保健室へ来るようになってきた。「具合が悪いなら保健室でやすみなさい。」とお母さんから言われたというのである。だれに助けを求めたらよいのか，子ども自身がいっしょうけんめいに探している気がする。

“子どもを看る”ということばがある。看るとは，手をもって目となすということである。すぐ薬を与えるのではなく，手を当てて子どもの状態をみていくということである。

この面が，おろそかにされているのではないかと思う。食事ひとつにしても，できあがるまでにいろいろ細かい仕事があり，作る過程で手がぬけなかった。今のような，湯をかけるだけでできあがるものではなかった。

プロセスを大切にする“手をもって目となす”ということが失われつつある現代である。

目的を達すればよい。途中のプロセスは抜いてしまうという傾向が何かにつけて目立ちはしないだろうか。人間の成長のプロセスは長いし，プロセスで手をかけるのが重要である。

データのないままでの話で，もどかしい気がするが，２年後に調査報告をしてみたいと思う。

指導のチェックポイント

高校英語

読解指導について

～AETとのTeam Teachingによる「読み」の指導の工夫～

1　問題点

中学校及び高等学校における英語教育の一層の充実を図り，諸外国との相互理解及び我が国の国際化を推進するために実施されてきた文部省の「米国人英語指導主事助手招致事業」により，本県でも昭和58年にはじめて1名の英語指導主事助手が配置された。それ以来配置数も増加し，昨年度は4名になった。本年度（昭和62年度）からは，自治省及び外務省の協力のもとに「語学指導等を行う外国青年招致事業」が実施され，従来の事業はこの事業の中に発展的に引き継がれることになった。「英語指導主事助手」の名称もMEF(Mombusho English Fellows)からAET(Assistants of English Teachers)に変更され，本県では8月から6名が配置されることになった。

昭和58年度以降「英語指導主事助手」の活用については，各学校でさまざまな取り組みがなされているが，その成果については意見が分かれるところであろう。普通高校の中でも，特に進学校と呼ばれる学校では，読解指導での活用が困難である。従って大学受験にはマイナスになるという理由で活用を敬遠する向きがあるという。はたしてAETは読解指導には不向きであろうか。

文部省は「英語教育の質を高めると同時に，外国人の日本理解を促進し，経済摩擦解消にも役立つ」ということで初年度の成果が出れば，数年後には全国で5,000人～10,000人に拡大したい意向だというから，本県でもざっと30人～50人の配置が見込まれる。もしそうなれば，英語教師は好むと好まざるとにかかわらず，英語の全領域の指導でAETを活用することを余儀なくされる。また，従来からの文法・訳読中心の教授法と比較して，AETを活用した運用面を重視する英語指導は，語学教育の方法論から言ってもまさに正論であるから，「大学入試」ということでAETを敬遠してばかりはいられなくなる。その意味で，近年まだ数は少ないが，日本の国際化及び中学・高校の英語教育の方向を反映した大学入試問題が見られるようになったことは喜ばしいことである。

結論的に言えば，「読解指導」でも，従来の文法・訳読中心の教授法に代わってAETを活用した教授法の確立が迫られているということである。AETは英語教師にとって，まさに「黒船」であり，発想の転換を図らないかぎり日本の次代を担い，国際社会で活躍する有為な人材を育成することはできないであろう。

そこで，今後の新しい英語教育の方向を探る意味で，AETとのTeam Teachingによる「読みの指導の工夫」について述べてみたい。

2　AETとのTeam Teachingによる「読み」の指導

「訳読法」は，意味の理解に日本語を介在させながら，一文ごとに日本語訳をつけていく。従って，目は一度読んだ所に逆もどりして，正しく読んだかどうか確かめようとする。いわゆる，「逆行読み」(Regression)が生じる。「逆行読み」をしながら「読み」のスピードをあげることなど論外である。この「逆行読み」を排除するために，「読む」前に「聞く」ことから始めてはどうであろうか。つまり，「読み」(Reading)と「聞く」(Listening)の指導を関連させて，Readingの前にListeningの指導を徹底して行うのである。Listeningの場合は，一定のスピードで話される事柄の要点や概要を限られた時間で聞き取らなければならないので，「逆行」したり細部にこだわったりする余裕はない。「訳読」に対して「直読直解」という言葉が使われるが，聞いてそのまま理解する，つまり「直聞直解」の訓練をすることにより，「直読直解」の習慣形成をするのである。

教科書はその性質上，各課に新しい文型や語（句）が出てくるので，生徒のレベルに合わせて既習の文型や語（句）でparaphraseしたものをAETに読ませてそれを聞かせる。どうしても言い換えが困難な場合でも，すぐに日本語訳を与えるのではなく，contextからそれが「どのようなもの」なのか，あるいは「どのようなこと」なのかを類推させる。これは何も目新しい方法ではないが，意外に形式的にしか行われていないのではないだろうか。このOral Introductionによって，本文を読む前にその概要を十分に把握させる。聞き取りが難しいと思われる場合は，問題意識を持って聞けるようにListening Pointsをいくつか与える。

次に，本文の読みに入るが，すぐに読ませるのではなく，AETが読むのを聞かせながら文字を目で追わせる。これを2，3回くり返す。途中で理解できないところがあっても絶対にregressionはしないように注意する。このようにして，英文の流れにそって要点や概要を読み取る習慣形成の基礎作りをする。

続いて，本文を黙読させる。読み終わったら，しばらく時間を与えて，日本語か英語で内容をまとめさせる。最終的には英語でまとめさせたいが，最初のうちは日本語でよいのではないだろうか。この際注意すべきことは，生徒は従来どおり一文一文訳したり，書いてあることを全部言おうとしたりするので，要点をとらえて概要を述べるように指導することである。

最後に，大意の把握ができたらAET をモデルにして音読指導を徹底的に行い，正しいストレス，イントネーション，ポーズ等を体得させるとともに，文字ー音声ー意味の結合を強化して「英語の論理」を身に付けさせる。高校の英語の授業の中で一番欠けているものの一つが，この音読指導ではないだろうか。「訳読」のあとで文字ー音声ー意味の結合をさせないままに，つまり，「日本語の論理」で理解して，そのまま次の課に進むことが多いと思う。

以上述べた手順の中で，AETをどの場面で，どのように，どの程度活用した方が一番効果的であるかは，英語教師の一人ひとりが，今後のAETとのTeam Teachingの実践の中で見出していくべきものであると思う。

3　今後の課題

教師も生徒も「訳読法」に慣れてしまうとそれから脱却するのは至難である。教師が何か新しい試みをしようとしても，生徒が不安気な顔をすると，つい日本語訳を与えてしまい，それで両者とも何となく安心してしまう。

しかしながら，日本の英語教育界はいま一大転換期を迎えようとしている。英語教師はAETの有効活用を図り，新しい英語教育の道を切り開くことを期待されていると言っても過言ではない。Nothing venture,nothing have.

（所員　寺田　範男）

中学道徳

道徳の時間の指導前の在り方

1　道徳の時間とは

道徳の時間の指導は，生徒が日常直面する道徳的な諸問題の直接の解決を目指すのではなく，生徒自らが時と所に応じて望ましい道徳的な行動ができるように，道徳的な判断力を高め，心情を豊かにし，道徳的態度と実践意欲の向上を図ることによって，人間の生き方についての自覚を深め，道徳的実践力を育成することを目的としている。すなわち，道徳の時間の指導は，生徒一人ひとりの生き方についての自覚を深め，よりよい生き方を探求し，それが実践に現れてくることを期して行われる。この「人間の生き方についての自覚を深め」ることは，小学校の道徳の時間の目標にはなく，中学校のそれに出てきている。これは，生徒の自我意識の発達に伴い，その生き方についての関心にこたえて行われることが大切であるためだと思われる。この「人間の生き方についての自覚」は，人間とは何かということについての探求とともに深められるだろう。このことは，道徳の時間の指導に関するすべてに，例えば，生徒の実態把握，資料の選択，発問などにかかわってくるだろう。

2　道徳の時間の指導前における検討

道徳の時間の指導は，生徒のよりよい生き方への関心に即して，生徒自らの問題となるように指導することが必要である。そしてこそ，生徒は自らの生き方についての自覚を深め，生徒一人ひとりの道徳的実践力が高まっていくであろう。そのためには，次のことを道徳の時間の指導前に十分検討しておくことが必要である。

① 指導すべき内容の道徳的価値に対する教師自身の考え方，つまり，価値観は確立しているか。

この価値観があいまいであると，生徒の日常生活上の問題を十分にとらえることや，適切なねらいの設定，適切な資料の選択や活用をすることができず，この時間いったい何を指導したのかが不明瞭になる。

② 指導すべき内容の道徳的価値に対する学級の生徒の実態はどうであるか。

生徒の実態把握は，生徒一人ひとりの日常生活に現れた言動だけでなく，生徒の内面にある感じていることや考えていること，悩んでいることなどを的確にとらえることが大切である。しかし，それだけでなく，生徒一人ひとりがよりよく生きようとする願いにまでふれて，一人の人間として理解することが大切である。

③ 上記2点に基づくねらいが明確にされているか。（上記2点に資料との組み合わせを考えて，ねらいを設定する場合もある。）

この場合，次のことに留意することが大切であろう。

○ 生徒のよりよい人生に向ける教師の願いを見失わないようにする。
○ 資料に無理にねらいを結びつけたり，資料に左右されてあらかじめ考えていたねらいから外れ，全体としてのまとまりを崩したりしない。
○ いたずらに関連する価値を多くして，指導の焦点を不明確にしない。
○ 指導しようとする道徳的価値と資料との関係に目を奪われて生徒の実態を忘れない。
○ 指導する主題を通して，道徳的判断力，道徳的心情，道徳的態度などのどの面に重点をおくか，ねらいの中で明らかにしておく。

④ ねらいに迫るための，資料の内容の分析はできているか。

道徳の時間は，道徳的価値を理論的な説明によってのみ理解させようとしても効果は少ない。そこで，年間指導計画に位置づけられている資料を活用することによって資料の中の人間の具体的な生き方にふれさせ，その時間のねらいを達成する。

そのためには，教師の資料分析が必要になってくる。資料分析は，資料の中に含まれているいろいろな道徳的価値の中から，本時のねらいとする道徳的価値を引き出し，そのねらいとする道徳的価値は資料の中のどこをどのように深く追及していけば発見できるかを明らかにするためである。そのために，次のことをふまえて資料分析をすることが大切であろう。

○ 登場人物の人間関係をつかみ，物語の順序，筋道の概要や，主人公の行動，気持ち，考えの変化及びその原因をつかむ。その場合，特に主人公などをとりまく周囲の状況をしっかり把握する。
○ 感動や感銘を受ける場面を見つけ，考えなければならない場面に注目する。
○ 主人公の言動，気持ち，考えに共感，批判などを加え，その背後にひそむ価値を識別する。
○ ねらいに迫る中心価値と資料の中心場面との関連を明確にする。

⑤ ねらいを達成するための指導過程はどうあるべきか。

導入，展開，終末の段階での発問がどんな役割をもつかを考えて構成することが大切である。指導過程はいろいろ考えられているが，一般的には，次のよな指導過程が多く用いられているようである。しかし，これにとらわれることなく，学級の実態や指導者の個性に応じて，常に弾力的に取り扱い，指導過程を創造していくことが大切である。

（導入）
○ ねらいとする価値への方向づけをする。
○ 主題に関する興味，関心を高め，学習への意欲を喚起する。

（展開）
前段・・資料の活用によって，ねらいとする価値の追及，把握を行う。
後段・・資料を通して把握された価値の自覚化を図る。

（終末）
○ 学習した内容をまとめる。

3 道徳の時間がより充実するには

今まで述べてきたことをふまえて巧みな授業がなされたとしても，やはり，一番大切なことは，これは道徳の時間に限ったことではないが，教師と生徒，生徒相互の人間関係が信頼で結ばれていることである。そして，教師は，常に生徒と共によりよい人生を求めて歩むという態度で指導に当たることを忘れてはならないであろう。

（所員　谷口　浩）

昭和62年度
教育センター研究主題と研究委員の紹介

1 基礎調査
「学習意欲と児童・生徒の生活実態にかかわる調査研究」
※研究委員　宮崎正則，光吉雅之（教育センター所員）

2 小学校国語
「理解・表現の関連指導に関する研究」～読解した結果を作文活動に生かす指導～
※研究委員　平野禎亮（神埼小），岩永　悟（東与賀小）

3 小学校社会
「歴史学習における郷土資料の精選と活用に関する研究」～郷土史に登場する人物の指導を中心として～
※研究委員　杉谷保成（北鹿島小），大島茂人（基里小）

4 小学校算数
「図形学習能力の発達と授業に関する研究」
※研究委員　内山秀治（思斉小），草場　浩（三田川小）

5 小学校理科
「自然に親しませる学習環境づくりの工夫」～生物とその環境を中心に～
※研究委員　金子幹夫（黒川小），土井征一郎（桜岡小）

6 小学校道徳
「道徳的実践力を育てる指導」～自己を道徳的に見つめさせる指導の工夫～
※研究委員　山口大樹（金立小），植松直樹（嬉野小）

7 中学校特別活動
「中学校特別活動の活性化を図るための方策の研究」～生徒会活動を中心にして～
※研究委員　林洋二郎（成章中），牛丸和人（大川中）

8 高校理科　生物・地学
「生物・地学領域における身近な自然を生かした理科教材の研究」
※研究委員　木村直樹（小城高），川崎清隆（東松浦高）

9 中・高の連携を図った指導の工夫
①国語　「小説教材の教材分析と取扱いについて」
※研究委員　石橋道秀（三瀬中），永田安義（鹿島東部中），時津正純（伊万里高），山口成夫（佐賀西高）
②社会　「歴史学習と国際理解」
※研究委員　木原正和（白石中），池田正明（嬉野中），森田俊彦（伊万里高），福田文明（武雄青陵高）
③数学　「関数の教材分析と指導法のあり方について」
※研究委員　木原敏也（鹿島西部中），中尾弘三（佐大付属中），梶原彰夫（武雄青陵高），田中正昭（鹿島高）
④理科　「理科学習における生徒のつまずきやすい中・高関連部分の指導について」
※研究委員　石崎寿人（西唐津中），武富與一郎（思斉中），松延浩気（唐津西高），名和長泰（武雄高）
⑤英語　「中学校高学年から高等学校低学年にかけての長文読解力を高める指導のあり方」
※研究委員　林眞智子（白石中），椛島陽一郎（佐大付属中），稲富　饒（伊万里高），松隈香月（鳥栖商高）

10 教育評価
「形成的評価のあり方についての研究」～主体的学習態度を育てるために～
※研究委員　井樋章夫（東脊振中），田代勝（城西中）

11 教育工学
「パソコンを教育にどう生かすかについての研究」～小学校算数，中学校理科の教材開発を通して～
※研究委員　橋本　徹（鏡中），稲田義邦（山内東小）

12 特殊教育
「佐賀県における児童・生徒の生活体験に関する調査研究」～いじめの背景を考える～
※研究委員　古藤良春（湊小），光武充雄（循誘小），長森君代（武雄北中），平山健治（神埼高）

13　パソコン
「学校教育におけるパソコン利用の基本的あり方の研究とＣＡＩソフトウェアの開発」
①小学校部会研究委員　山浦武夫（長松小），天野昌明（旭小）
②中学校部会研究委員　古賀靖夫（鍋島中），北村喜久次（有明中）
③高等学校部会研究委員　野中　亮（佐賀工高），石戸政贊（鳥栖商高）

教育図書・研究資料の利用案内とお願い

教育センターの図書資料室には，学校現場における研究・実践のための参考資料として利用していただくための，多種の資料が整理保管されています。このことについて，ご存知ない先生もいらっしゃるようですので紹介します。今後，活発なご利用をおすすめいたします。

保管されている資料で主なものは，全国の教育センターから送られて来る研究紀要類と毎年購入している教育関係の書籍です。さらに，県内学校の研究紀要もかなりの数にのぼります。これらの研究紀要は，現在およそ12,000冊で，それを各教材・領域の内容別に分類をしています。また，教育関係書籍は，8,000冊を越えており，各教科・領域別に書架に配列されています。

これらの他にも，教育関係雑誌類・教科書・学校記念誌・新刊書籍案内・各地の特色ある研究校案内などがあります。

各教科・領域の理論から実践まで，全般にわたって情報が得られると思います。何か資料が必要になりましたら，遠慮なくおでかけください。

昨年度の利用状況をみてみると，利用冊数はおよそ5,600冊（延べ）になります。所員や長期研修の先生の利用が多いのですが，一般入室者の方も多く，その中で，およそ200名の先生方が，紀要や書籍を借り出されております。講座受講後，図書資料室まで足を延ばされて，参観や資料の検索をされている姿も多く見かけます。

利用される場合は，直接おいでいただき，資料を検索していただきますが，検索方法などのわかりにくい点は，係の者に相談していただけばお手伝いをいたします。

また，電話で問い合わせられる方も，かなりいらっしゃいます。できるだけ係としても便宜をはかっています。

校内研究会・個人研究などのために，午後の来訪者がかなりおられます。また，熱心な方で夏季休業中に，一日中図書室で勉強されている姿も見受けます。夏季研修も目前にせまりました。豊富な資料の中でじっくりと勉強をしにおいでになりませんか。午前８時30分から午後５時15分まで，自由に図書室を利用してください。椅子は26脚ありますし，部屋も明るく広いのでゆっくりと過ごせます。

資料の貸出しについては，台帳に記録していただくだけで結構です。需要が多いために，できるだけ早い返却をお願いしています。一週間を限度としていますので，ご協力ください。場合によっては，所内のコピー機を使って，必要な部分だけお持ち帰りいただくこともあります。

貴重な資料類ですから，破損・紛失がないよう，また，確実な返済をお願いしております。

図書資料係では，紀要，書籍，その他の資料を整理・保管する仕事以外に，利用される先生方の手伝い（レファレンスワーク）もできる限りしております。一方，資料の収集にも力を入れておりますが，県内各学校の実践資料・研究紀要が思うように集められずに困っております。具体的実践・学習指導案などは，全国の教育センター関係の資料では十分と言えません。そこで，研究発表会をされた学校には紀要の寄贈をお願いしたりしていますが，自主研究・校内研究などの冊子までは集めることができずにおり非常に残念に思っております。そういう研究資料を一部寄贈していただけば，いっそう充実した資料を現場の先生方にも提供できると思いますので，どうかよろしくお願いします。

各学校とも，熱心な研究，充実した実践が続けられている昨今です。側面から応援できる教育センター資料室であるためには，資料の充実がまず大切であるとの認識で，収集に当っております。ご協力を重ねてお願いします。

（教育資料室から）

新任です。　よろしく!!

今春の人事異動によりまして、当教育センターでは９名の職員が転入してまいりました。横顔をご紹介します。

①　氏名（所属課・係・担当教科）
②現住所
③前任校または前勤務部・課
④家族構成
⑤趣味・特技

①原　正水（所長）
②佐賀市城内２丁目
③唐津東高等学校
④妻
⑤囲碁

①小石　敏（総務課長）
②佐賀市高木瀬町東高木
③佐賀県中部家畜保健衛生所
④妻・子供２人
⑤写真・楽器

①西山武人（研修一課長・高校社会）
②佐賀市北川副町木原
③佐賀県教育庁教職員課高校人事
④妻
⑤旅行・登山・囲碁・園芸

①寺田範男（研修一課教科係・高校英語）
②三養基郡三根町天建寺
③鳥栖高等学校
④妻・子供３人
⑤スポーツ

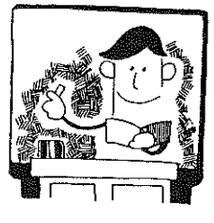
①中村清一郎（研修一課教科係・中学数学）
②鹿島市大字三河内
③多良中学校
④妻・子供３人・父母
⑤園芸・山歩き

①杉原豊秋（研修一課教科係・中学国語）
②武雄市武雄町武雄
③塩田中学校
④妻・子供３人
⑤書道・卓球

①築山正純（研修二課教育資料係・小学国語）
②神埼郡神埼町城原
③鍋島小学校
④父母・妻・子供３人
⑤旅行

①大平伸夫（研修三課理科教育係・中学理科）
②唐津市山下町
③大良中学校
④妻・子供３人
⑤野鳥観察

①松尾雅則（研修三課理科教育係・小学理科）
②佐賀市鍋島町八戸
③本庄小学校
④母
⑤写真・音楽鑑賞



私のすすめる一冊の本

「中　勘助集」　（新潮文庫）
編者　小堀　杏奴

生涯をかけて自己を内省し，論理的な高い境地を追及した求道者とも言うべき孤独な詩人，随筆家の上品な小品集である。苦悩と激情のないまぜになった果てに到達する静謐の境地は何度読んでも多大な感銘を受ける。

中勘助という人を知るには代表作「銀の匙」も併せ読むことを推奨する。

集中十編の小品がおさめられているが，「しづかな流」に特にひかれる。

伊万里高等学校
校長　桜井英二郎

「ことばの歳時記」　（株式会社文藝春秋）
「ことばの季節」　（　〃　〃　）
著者　山本　健吉

「一冊の本を」との依頼であったのに，あえて二冊にしたのは，私にとってこれは一冊の本だからだ。日本のことばをこよなく愛する山本氏の著書である。教育の専門書の中で明け暮れる私たちに，日本人が長い歴史の中ではぐくんできた美意識と，生活の知恵を伝えてくれる。どの頁からも日本人の美意識によってふるいにかけられた「ことば」がやさしく温かく心にひびく。美しい日本のことばよ!!

佐賀市立成章中学校　校長　倉持　末男

「学び方学習研究」　（明治図書）
著書　学び方教育研究所（近藤国一）

学力の向上が叫ばれてからもう30年にもなるが，子どもの学力はいっこうに向上していない。その要因として，知識の伝達や内容の精選等があげられているが，子どものやる気，即，精神構造も大きく影響しているといわれている。そこで，学ぶ力を育てようとする学び方学習が実践されれば，学力はおのずと向上するという観点から実践がなされ，参考必読の一冊ではなかろうか。

嬉野町立不動小学校
校長　葉瀬垣元夫

「新しい知性と徳を求めて」（ぎょうせい）
今道　友信

五つの講演内容をまとめたものである。教育の根本問題について，知性の活性化と新しい道徳を求めて哲学的思索が試みられている。五つは，それぞれ独立した内容であるが，その底には一貫して著者の「人間の哲学」が流れている。

教育を根本的に見直す上で，示唆に富む好著である。話し言葉で表されているので，親しみやすく，著者の体温が伝わってくる。

伊万里市立立花小学校
校長　前田　和茂

昭和62年度
教育実践・研究記録募集

児童・生徒の学力・体力の向上を図り，豊かな人格の育成をめざして，先生方には日夜，学校教育のそれぞれの分野で，研究・実践を重ねておられることと思います。

学校全体で，グループで，あるいは個人で，研究・実践されております貴重な記録を整理され，論文にまとめられまして，奮ってご応募ください。

応募締切り　昭和62年12月5日（土）
枚　　数　教育センター配布原稿用紙で15枚以内

なお，詳細につきましては，「昭和62年度教育実践・研究記録の募集要項」を各学校に配布しておりますので，それを御覧ください。

※　問い合わせ先
佐賀県教育センター　研修一課教科係
（担当　中村清一郎）

教師として，
あなたは今何を求めていますか